

祥伝社新書

SHODENSHA  
SHINSHO

# 英国人記者が見た 連合国防勝史観 の虚妄

Henry Scott-Stokes  
ヘンリー・S・ストークス

英国人記者が見た 連合国防勝史観の虚妄  
ヘンリー・S・ストークス



9784396113513



1920221008007

ISBN978-4-396-11351-3  
C0221 ¥800E

定価： 本体800円 + 税



H・S・ストークス

1938年英国生まれ。61年オックスフォード大学修士課程修了後、62年フィナンシャル・タイムズ社入社。64年東京支局初代支局長、67年ザ・タイムズ東京支局長、78年ニューヨーク・タイムズ東京支局長を歴任。三島由紀夫と最も親しかった外国人記者としても知られる。著書に『三島由紀夫生と死』（徳間書店）、『なぜアメリカは、対日戦争を仕掛けたのか』（祥伝社新書、加瀬英明氏との共著）。

## 英国の知性が見た、日本の戦後 (本書の目次)

- 第1章 故郷イギリスで見たアメリカ軍の戦車
- 第2章 日本だけが戦争犯罪国家なのか
- 第3章 三島由紀夫が死を賭して問うたもの
- 第4章 橋下市長の記者会見と慰安婦問題
- 第5章 蒋介石、毛沢東も否定した「南京大虐殺」
- 第6章 『英霊の聲』とは何だったか
- 第7章 日本はアジアの希望の光
- 第8章 私が会ったアジアのリーダーたち
- 第9章 私の心に残る人々
- 終章 日本人は日本を見直そう

# 歴史の嘘が見抜けると、 評判のベストセラァー!

祥伝社新書

祥伝社  
新書  
351

「日本は戦争犯罪国家」論を  
信じて疑わなかった  
ベテラン  
ジャーナリストの  
歴史観は、  
なぜ変わったのか?



第六章 『英霊の聲』 とは何だったか

## 国家元首として次元を異にした昭和天皇

三島由紀夫は、何についても話題になった。つまらない話題でも、三島が語るだけで、面白さが醸<sup>か</sup>いだされた。そういうことができる華やかな存在で、彼を凌駕<sup>りやうが</sup>する者はいなかった。刺激的で、ヴィヴィッドな表現を使いこなす達人だった。

大東亜戦争は、三島に大きな影響を与えた。父親の平岡梓<sup>ひらおかあずき</sup>の影響があった。霞が関の官僚だった父親は、大東亜戦争について、官僚的なシニカルな見方をしていた。日本が戦争に敗れると端<sup>はな</sup>から思っていた。だから、敗戦後の準備をしておくべきだと、考えていた。この点で、三島親子は現実的<sup>リアリスティック</sup>であった。二人は戦争に敗れて、日本がどうなるか考えていた。三島のナショナリズムと国への誇りは父から受け継いだもので、誰の影響でもない。

三島が考えていたのは、永遠に国を護<sup>まも</sup>つてゆくには、どうしたらよいかということだった。日本は他国にない固有の歴史、文化、伝統を有していると信じた。外国人には理解できない、日本の本質<sup>ホウシツ</sup>があると思った。そうした日本の文化を防衛しなければならぬと、考えた。差し追った敗北を自力は、重要ではないとみなした。

そのために、ミズーリ号艦上での降伏文書の調印も、三島には瑣末<sup>さまつ</sup>なことだった。むしろ

ろこの国の精神的な在り方、魂とか神性をどう防衛すべきか思いを寄せていた。このような認識は、十五歳の学習院の生徒だった時から、友人たちの意識をはるかに超越したものだ。学習院の教員が、富士を望<sup>のぞ</sup>む三島という地名が、平岡という本名よりもふさわしいと、名づけてくれた。

三島が昭和天皇をどのように捉えていたか。昭和天皇は崇敬者が多かった一方で、シニカルな見方をする者もいた。セイコーのブランドで知られる服部時計店の服部一郎<sup>はっとりいちろう</sup>もそうだった。一郎は創業家である服部一族の一員で、エプソンというブランドを立ち上げた人物だったが、働き過ぎのため、五十代で他界した。

私は服部一郎が亡くなる半年前に、ロンドンで突っ込んで話す機会があった。服部は私が三島と親しかったことを知って、天皇について語った。昭和天皇の知性が「小学校教師程度だ」と決めつけて、知性が高かったら軍の言いなりにならずに、戦争を避けることができたと言った。服部はアメリカのエル大学で学んだが、日本の歴史より、ゴルフとビジネスを生き甲斐としていた。

昭和天皇についてこうしたシニカルな見方をする者が、一部にいた。単なる人間としての世俗的な能力を云々<sup>うんぬん</sup>する議論だ。しかし、天皇という存在は、選挙で選ばれる大統領や

首相などの国家のリーダーとは、まったく違った価値を有している。

敗戦の時の国家元首であったにもかかわらず、昭和天皇は敗戦後も国民の崇敬を保ち続けた。世界史の奇跡といってよい。

敗戦時の国家リーダーは、処刑されるか、亡命するかで、国家元首であり続けるということはない。地位を保持しえても、暗殺されかねない。

昭和天皇はまったく次元を異にした。敗戦後もたいした警備もつけずに全国を行幸され、国民から歓喜して迎えられた。東京裁判のウェップ裁判長は、裁判を終えた後マスコミのインタビュを受け、天皇という存在について問われて、「神だ」と答えている。

しかし、天皇を精神的リーダーとする見方、文化的存在として捉える見方と、服部の見当外れな見方が相容れないわけではない。明治憲法が天皇に、政治的な役割を強いたことに無理があった。

天皇は個人としての能力より、天皇であることそれ自体が、貴いのだ。同じことが、イギリス王室にもいえる。

服部一郎と同じ考えのインテリが多い。昭和天皇に判断力や主体性があったならば、戦争を回避でき、戦争犠牲者もいなかったと主張する。三島はこうした議論も知り尽くし

たうえで、天皇を位置づけた。

### 天皇の「人間宣言」に対する三島の批判

ドナルド・キーンは『明治天皇』という、英文で九〇〇ページ、邦訳で上下二巻の大著を上梓している。そのなかで孝明天皇の崩御が語られ、キーンは孝明天皇が暗殺されたという見方をとっている。どのように暗殺が実行されたのか、詳細に論じている。

私はキーンに右翼と問題が起ころなかつたか、尋ねたことがある。調査をしている段階で、右翼が二人電話をしてきたという。しかし、それだけだった。皇位継承の折に暗殺されたり、天皇には世俗的な側面があり、生身の人間世界を感じさせる。

マッカーサーは天皇の神性を否定したかったから、昭和二十一年元旦に昭和天皇に「天皇の人間宣言」とされる詔勅を、発表させた。これは意味がなかった。神が「神でない」といっても、神性を失うわけではない。天皇は自らの力で、神になったのではない。昭和天皇は「天皇の神格をもって世界を支配しようとした」ということはない、そのことを否定されたまでだった。

三島は天皇を現人神と認めない世の風潮に、反駁した。それが有名な『英霊の聲』での

呪詛だ。

「なぞてすめろぎは人間となりたまひし。  
なぞてすめろぎは人間となりたまひし。  
なぞてすめろぎは人間となりたまひし」

天皇は人であると同時に、神性を持った神聖なる存在なのだ。現人神なのだ。人間的な側面と、神聖なる側面は矛盾しない。現人神は人であると同時に、神性を持った存在なのだ。

一九四六年元旦の詔勅は「天皇の人間宣言」とされているが、そのようなものだったかどうかという議論と別に、三島は「現人神」としての天皇を否定する風潮に警鐘を鳴らしたのだ。

マッカーサーが天皇に「人間宣言」を強要したのは、次元の低いことであり、浅薄なことだった。

三島の『英霊の聲』は、天皇に「人間宣言」をさせたことへの痛烈な批判だった。占領

軍と一緒にあって、天皇の「人間宣言」を受け入れた国家と国民の在り方に、警鐘を鳴らした。神話の時代から続く天皇という存在を否定することが、道を誤っていると信じた。

そこに、三島が命を賭しても守るべきものがあつた。「国体」といつてよい。それを守ろうとして、三島は自衛隊の市ヶ谷駐屯地で自衛隊員たちに決起することを促し、失敗すると、死を選んだ。

命と引換えてでも守ろうとするものがなかつたら、三島は死ななかつた。人気作家で、経済的にも豊かだった。ノーベル賞候補としても名があがり、多くの読者がいた。この世に満たされないものがなかつた。

その三島を「国体」という一点が、捉えて離さなかつた。論壇の言葉の世界ではなく、現実に命を失つても守るべきものがあり、生き様の体現だった。

「なぞてすめろぎは人間となりたまひし」という「英霊の聲」は、三島の魂の奥底からほとばしった叫びだった。

### 日本にとつての「国体」とは何か

昭和天皇が崩御され、国葬が行なわれた日に、私はある人を麻布の自宅に訪ねた。

その日は、朝から雨が降っていた。三島ととくに親しかった人と、ひと時を共にしたかった。その人は私を書齋に通してくれた。経営者であると同時に詩人でもあり、多くの著書を出版していた。

私は同じ気持ちをも、分かち合いたかった。私たちは一緒に三島の『英霊の聲』の一節、「なぞてすめろぎは人間となりたまひし」を繰り返して、声に出して唱えた。

私の日本語はつたないが、この一文には力を感じた。サイデンステッカーも、その一人だった。この一句の持つ不思議な力に、魅了されていた。

私が会ったのは、堤清二だった。堤は三島文学の理解者だった。三島自身が私に、堤のことを「尊敬に値する経営者が、日本に一人いる。たった一人の面白い男だ」と語っていた。堤はセゾン・グループの創始者だった。父は有名な「ピストル堤」で、弟の義明は西武鉄道を率いて、当時は野球の西武ライオンズのオーナーでもあった。

加瀬英明氏は三島の行動を非難する。「諸君！」に『楯の会』の制服はキャバレーのドアマンのようだ」と、寄稿している。自衛隊の市ヶ谷駐屯地で卑劣にも、武人の総監を騙して縛りあげた。真面目にクーデターを企てたのだらしたら、六本木の防衛庁の長官室を占拠すべきだったと、批判する。

だが、長官室には、バルコニーがなかった。アルミサッシの窓から顔を出したのでは、舞台装置としてふさわしくなかった。しかし、三島が檄文で訴えたことは、加瀬氏が言論を通して訴えていることと通じている。戦勝国の占領支配から、歴史ある主権国家として、天皇を戴く国家として、「国体」を取り戻さなくてはならない、ということだ。

出征した日本軍将兵が最後には特攻隊となって、現人神としての天皇と国体を守るために、死んだ。私は三島が言葉だけではなく、自らの命を捧げて訴える道を選んだと信じている。命に替えても守るべきものが、あったのだ。

外国人は三島の価値観を、さまざまに受け止めている。三島は外国人にもわかりやすい形で、価値観を小説にし、さらに表現する手段として決起をした。

私は、三島は真剣だったと思う。希代の小説家として文章で訴え、その価値観を行動で表現した。類例のない人生を、主体的に生きた人だったと信じる。三島のような男は他にいない。小説が現実であり、現実が小説のような三島の世界を創った。その観点でイデオロギーを超克している。現実と非現実を、同時に存在させた。

三島は、日本が他国が持っていない素晴らしい宝物を持っていることに、気づいた。三島は典型的な日本人ではない。純粹な日本人であるとともに、西洋文化に感化されて、体

現し、並みの日本人ではできない発想と思考をもって、行動をした人だった。そんな三島が特攻隊の純粹な愛国の魂に打たれ、その姿を追求した。三島は特攻隊を誇りに思っていた。三島は日本人の精神性が外国人には、絶対に理解できないと信じていた。

あえて挙げれば、アイヴァン・モリスが唯一人の例外だったろう。サイデンステッカーは三島の『豊饒の海』の第四部『天人五衰』を英訳したが、三島と個人的にそれほど繋がりが深かったと思えない。ドナルド・キーンのほうが親しかった。モリスが日本史の英雄たちについてまとめた著作のなかで、三島由紀夫も取り上げているが、一章を割いていない。モリスにも、書けなかったのだ。

三島も私なら自分がわかるだろうと、思っていた。私はそう確信している。

当時の政治家の佐藤栄作や、中曾根康弘も、命を捨てて訴えてはいない。彼らは三島を、**マツド**狂気だと言った。もちろん、狂気だ。日本が墮落したのを見て、狂気にならずにいらなかった。

### 三島の評伝を執筆中に起こったこと

私にとって著書『三島由紀夫、生と死』の第一章を書くことは、精神的にとっても厳しかった。何が起こったか、ひとつひとつ書いていったからだ。文章も練らねばならなかったし、事実関係に正確を期さなくてはならなかった。狂気にならなければ、あんな行動を計画することはできない。それは崇高な儀式だった。

第一章を書くのに、数年を要した。私の本は死の場面を抜きにして、完成しなかった。途中でどうして書き上げることができないと、何度も思った。

起こったことの衝撃は、凄まじかった。しかし、三島とともに過ごした唯一人の外国人ジャーナリストとして、書かないわけにいかなかった。自決の直前に三島本人から、「この世の終わり」と書かれた英文の手書きの手紙が、私に送られてきた。

「親愛なるヘンリー」

僕が書いた論文と短編小説を同封した。

気に入ってくれるといいが。

また、最後の二編を書いている思いによって、**オキユバイド** 囚われている。

長編を書き終えてしまうと、なんだかこの世の終わりであるかのように、感じる。  
三島由紀夫」

三島は私にある意味で、賭けたのだった。わずかな可能性だったかもしれないが、三島は、私に賭けた。私は責任を痛感した。いままで私はこの気持ちを、語ったことはない。だが、私はそう感じた。

妻のあき子が芸術の勉強のために、パリへ赴いたので、私はスイスのシャレーに滞在した。チューリッヒの美しい湖に面したシャレーだった。私はタイプライターを持ち込んで、著述に専念した。しかし、書くほど、いや違うという気がした。

ところが、ある午後だった。私はいつものように音楽を聞きながら、書いていた。事実関係は同じだった。事実関係だから何度書いても、同じことだった。ところが、この日は違った。酔っていたわけではない。ドラッグなど使っていない。

突然、自然に手が動きだして、原稿をタイプしていった。まるで見えない手がタイプしているようだった。何かが私に憑依したようだった。あつという間に、四〇ページほど書き上げ、こうだったのだと、確信できた。これが現実に起こったことだったと、心から

納得した。

「原稿を書けた」と思って、立ち上がって窓の外を眺めると、スイスの緑の山々が見渡せた。近くの山の斜面に、リングの木が生い茂っていた。驚いたことに、その木々が踊りだした。私はただそういうことが起こっていると、受け止めた。

ヴァン・ゴッホがプロヴァンスの風景画で描いたような、風景だった。ゴッホの風景も、即座に理解できた。半分あちらの世界にいるような感覚だった。

その感覚は数時間続いた。もしかすると数分か、もっとわずかな瞬間だったかもしれない。思い起こすと数時間にも思えるが、わずかな時間だったのかもしれない。フランスの小説家バルザックが「書くということは、書き直すことだ」と言っているが、私はその原稿に一語一句たりと一度も手を入れていない。

靖国に首相や天皇が参拝できないという異常さ

かつて私は皇室と皇位継承について、コラムを書いていた。その時に、天皇が靖国神社へのご親拝を、一九七五年以降中断していることを知った。そこで宮内庁に問い合わせしてみた。



宮内庁の回答は「一九七五年以降、先帝陛下は一度も親拝をされておらず、今上陛下は、即位されてから一度も、靖国神社へのご親拝はしておられない」とのことだった。それ以上の詮索はしなかった。その事実だけを書いた。理由を尋ねなかったのは、それが厳粛な質問だったからである。

首相の靖国参拝は、田中角栄首相までは、何の反対もなく当たり前のこととして行なわれた。靖国参拝が問題となったのは、三木武夫首相の時、三木は靖国に参拝したものの、私的参拝で公的参拝ではないと、共同通信記者の質問に答えた。それ以来、マスコミは首相や閣僚の参拝が公的か私的かを問題にした。

欧米の政治家が教会で祈るのを、公人としてか、私人としてか、質問する愚か者はいない。神の前で公私の区別はあるまい。

戦後政治の総決算を掲げた中曽根首相は、初年度に首相として靖国に参拝したものの、翌年は中国の反対の意向を受け入れて、参拝しなかった。次に靖国神社を首相が参拝したのは、二〇年後の小泉純一郎首相の時だった。

一国の首相が戦死者を祀る靖国神社に参拝することが問題とされるなかで、天皇が靖国神社を参拝することは難しい。天皇に「私的」ということが、あり得るはずがないからだ。

だ。

一九七五年以降、天皇による靖国神社親拝が中断しているのは、残念なことだ。

マッカーサーは靖国神社を軍国主義、国家主義の象徴だとみなして、焼き払ってドッグレース場をつくらうとした。

マッカーサーが考えを改めたのは、バチカン法王庁駐日使節だったブルノー・ビッテル神父が書簡を送って、「戦勝国が敗戦国かを問わず、国家のために命を捧げた人に敬意を払うのは自然の法であり、国家にとって義務であり、権利でもある。もし、靖国神社を焼き払ったら犯罪行為であり、アメリカの歴史に不名誉極まる汚点を残す」と、警告したからだ。

靖国神社の参拝に反対する日本人を、ビッテル神父が生きていたら、どう思うことだろうか。靖国神社の境内のどこかに、ビッテル神父の像を建てれば、アメリカや、カナダ、オーストラリア、ヨーロッパをはじめとするキリスト教圏で、靖国神社がよく理解されることとなるろう。

戦犯の合祀のことが取り沙汰されるが、一九五二（昭和二十七年）年に、日本弁護士連合会が、「戦犯の赦免勧告に関する意見書」を政府に提出したことを契機に、全国に運動が

広がり、一九五五（昭和三十）年七月に、衆議院本会議で四二六名の国会議員が、赦免決議を可決した。この国会決議によって、日本から「戦犯」がいなくなった。

日本の大新聞は、靖国神社に「A級戦犯」が祀られているのは、許せないと主張しているが、それは国会決議を無視、否定していることになる。それだったら日本の民主主義がおかしいと主張し、国会を否定すべきだろう。

昭和天皇は、「敵国にとっては戦犯かもしれないが、わが国にとっては国のために尽くした功労者だ」と語られていた。いわゆる「A級戦犯」が合祀されているからといって、国を守るために命を捧げた英霊が祀られている靖国神社へ、天皇が親拝できないということとは、あつてはならないことだ。ジャーナリストが公人の靖国神社への参拝を、「公的か」「私的か」と尋ねる愚をやめて、自由に参拝できるようにすることが必要だ。

私は、戦争中に行方がわからなくなった人たちのことに、心を痛めている。私の義母の兄は、戦時中に商船に乗り組んでいたが、海に出て行方不明とされている。妻の祖母は時折、水平線を見つめながら海辺にずっと座って、息子の帰りを待っていた。

どうなってしまったのか、記録がない。家族は霊が靖国神社に帰ってきたと、信じている。素朴な気持ちだ。私も靖国神社に詣でて、日本の伯父の霊が安らかに眠っていることを祈ってきた。

### 三島が檄文で訴えたこと

オランダのジャーナリストであるイアン・ブルマーは、現在アメリカに住んでいるが、その三島論の中で、その晩年を「芸術家が道を誤った」と捉えている。彼は三島が国家を語りだしてから、おかしな方向へ走ったとしている。ブルマーは三島の死後、一九七五（昭和五十）年に、日本に来た。三島に会ったことはない。

三島が天皇や、日本の政治のあり方を語ったのは、道から逸れたのではなく、小説を書くことを含めて、すべてが魂が問われる国体へと収斂して行き、ついに死に至ったのだ。天皇や、雅や、日本の文化伝統を防衛することが、三島のメインテーマだった。

『英霊の聲』は、魂の訴えだった。私は「おばあさん」と呼んだ妻の母と、ずっと一緒に東京で暮らした。「おばあさん」は、いつも三島に興味を持っていた。そして私に「あなたの三島について言っていることが理解されるには、あと二、三〇〇年はかかるわよ」と言っていた。

三島が西洋で注目されるのは、小説家としての側面で、評論や、政治的活動は対象とな

っていない。私の描く三島像は、世界的に理解されていない。「おばあさん」が、正しいかもしれない。

私の感じる三島が人々に理解されるには、本当にあと二、三〇〇年は、時を待たないとならないかもしれない。私は、三島が檄文で訴えていたことは、大筋で正しいと思っている。しかし、西洋世界では、その観点はまったく見落とされている。

自衛隊の市ヶ谷駐屯地で、三島がバルコニーに立って、自衛官に決起を促した時、彼は檄で、自衛隊をアメリカの「傭兵」と呼んだ。フランスの外人部隊は、ヨーロッパの「傭兵」だ。「傭兵」とは、金で雇われる兵士のことだ。

兵としてプライドがあつたら、そんな侮蔑を許せない。檄の訴えと、三島の叫びを、私の著書『三島由紀夫 生と死』から引用したい。訳者は毎日新聞記者だった、徳岡孝夫だ。

読者はぜひ私と一緒に、音読してほしい。

正午少し前、森田と小川正洋の姿がバルコニーの上に現れた。総監室から出て、バルコニーの前のほうへと歩いて行く。紙の束と巻いた布を持っている。

広いバルコニーである。総監室の窓から一〇メートルはある。二人は楯の会の制服の肩に鉢巻の結び目を垂らした姿で、その先端まで歩いて行った。

彼らはしゃがんで垂幕の一端を固定し、自衛隊員たちに見えるようそれをバルコニーから垂らした。そこには益田総監の安全を保証する四条件が墨書されていた。

条件の一つは三島の演説への静聴を求めたものだったが、営庭はすでに騒々しかった。自衛隊員は口々に叫び、パトカーや救急車、社旗を立てた新聞社の車などが続々と到着し、それだけでもやかましいのに、ヘリコプターの騒音がさらに輪をかけた。

楯の会の二人は、バルコニーの上から檄を撒いた。紙は微風に乗ってグラウンドの上に散っていった。檄の文章は、一九三〇年代の日本に何度も起こったクーデターで青年将校が書いたものに、その体裁が似通っていた。要約すれば、次のような内容である。

われわれ楯の会は、自衛隊を父とも兄とも思ってきたのに、なぜこのような忘恩的行動をあえてしたか。それは、われわれが自衛隊を愛するがゆえだ。自衛隊には真の日本の魂が残されている。

われわれは、自衛隊が戦後日本の指導者によって利用されるのを見てきた。自衛隊は、自らの存在を否定する平和憲法を守るといふ屈辱の軍隊になり下がった。

このねじ曲がった状態を打破すべき機会は、永遠に失われた。一九六九年十月二十一日、佐藤首相訪米反対デモに対し、自衛隊は治安出動し、それによって建軍の本義を明らかにし、憲法改正を要求すべきだった。

チャンスは永遠に去り、国家の誇りは失われ、自衛隊は違憲のまま認知されることになった。

日本の真の魂は、どこへ行ったのか。天皇を中心とする日本を守るといふ自衛隊の真の姿を、復興する者はいないのか。

われわれは、自衛隊が決然として起つのを熱烈に待った。いまのままでは、自衛隊は永遠にアメリカの傭兵として終わるのであろう。

檄の最後の部分は、以下のようにだった。

「日本を日本の真姿に戻して、そこで死ぬのだ。生命尊重のみで、魂は死んでもよいのか。生命以上の価値なくして何の軍隊だ。今こそわれわれは生命尊重以上の価値の所在を諸君の目に見せてやる。」

それは自由でも民主主義でもない。日本だ。われわれの愛する歴史と伝統の国、日本だ」

自衛隊員たちは、舞い降りてきた檄を拾い、ある者はそれを読み、ある者はポケットに突っ込んだ。だが大部分の者が、理解に苦しんだ。彼らは若く、戦争の経験がない。日本は二十五年にわたって平和を享受し、日本外交の基本であるアメリカとの友好に挑戦するのは左翼だけである。彼らの頭では、右翼から攻撃される理由が呑み込めなかった。

彼らの多くは楯の会のことは知っていたが、その目的について無知だった。三島のような有名な小説家がなぜそんなものに関係するか、理解できなかった。そのうえ、現に彼らの上官が傷つき、目の前で救急車で運ばれて行く。なぜ上官を傷つけたのか？

正午ちょうど、その三島の姿がバルコニーに現れた。楯の会の制服を着ている。下からは、日の丸に七生報国と記した鉢巻の頭だけしか見えなかった。

三島は胸壁の上にとび上がった。全身が、はじめてはつきり見えた。制服のボタンが初冬の陽光を受けて輝いた。白い手袋に血痕が散っている。彼は仁王立ちにな

った。胸を張り、両手を腰にあてがった。

『このような状況の下で自衛隊の諸君と話したくはなかったのだ』と、三島はバルコニーの上の演説を切り出した。

ヘリコプターの騒音が、耳を聳さんばかりだった。自衛隊員の多くは、三島の言葉を聞きとれなかった。

『自衛隊は日本の最後の希望であり、日本の魂の最後の拠りどころであると思ってきた』

ヘリの群れは、さらに近寄った。

『しかるに、戦後の日本は経済的繁栄にうつつを抜かし、国の大本を忘れている。

日本の精神はどこへ行った！ 政治家は、日本のことなど考えていない。権力のみを追い求めている』

三島は続けた。

『自衛隊こそ真の日本の魂であろうと思った。しかし……しかし、われわれは裏切られた』

自衛隊員は、三島を野次りはじめた。

『やめろ、やめろ』

『バカ野郎』

『チンピラ！』

野次を聞いて、三島は怒った。

『静聴せよ、静聴せよ。聞かんか。われわれは、自衛隊にこそ真の日本の魂があると信じてきたのだ』

『何をほざく』

『降りてこい』

だが、三島は負けなかった。

『日本は精神的支柱を失った。だから、お前らにはわからないのだ。日本がわからないのだ。自衛隊こそ、それを正さなければならぬ』

しかし、隊員たちの野次は、おさまる気配がなかった。

『聞け。静かに聞け』

『バカ野郎』

『静聴せよと言っているのがわからないのか』

『英雄気取りするな』

『よく聞け。去年の十月二十一日に何が起こった？ 総理訪米反対の大デモだ。あの日、新宿で……警察が鎮圧したのだ。警察がやった。あの日以来、これから先もずっと、憲法を改正する機会は失われてしまったんだ』

『それがどうした！』

『自民党の政治家は、警察力を使えば鎮圧できると自信をもった。警察で十分なのだ。これがわかるか』

『そんなら警察を呼べ』

『いいか、政府は自衛隊に治安出動を求めなかった。自衛隊は一歩たりとも動かなかった。憲法改正は、その必要がなくなったのだ。改正のチャンスは失われた。これがわかるか』

『わからん。わからん』

『寝言を言うな！』

『よく聞け。去年の十月二十一日以来、お前たちは護憲の軍隊になったのだ。自衛隊は、憲法を守ることになった。自衛隊の存在を否定している憲法をだ。もはや改

正のチャンスはない。涙を浮かべつつ待った機会は、去ってしまったのだ。もう手遅れだ』

『どこが悪いんだ！』

三島は腕の時計を見た。まだ五分も話していない。

『これがわからんのか。去年の十月二十一日だ。われわれは、お前たちが決起するのを待った。自衛隊が目覚めるのを待った。もはや憲法改正のチャンスはない。自衛隊は永遠に国軍になれないんだ。支柱もなく。存立の根拠もなくなった。なぜ自衛隊は決起しなければならぬか！』

『降りてこい。チンピラ』

『お前たちが日本を守るのだ。日本を守る。日本……日本の伝統と歴史と文化を。天皇を……』

隊員たちの野次と嘲笑は、ますますはげしくなった。

『聞け。聞け。静かに聞け。男が、生命を賭けて訴えているのだ。これがわからんのか。自衛隊が……自衛隊がわれわれとともに決起しなければ、いつまでたっても憲法は改正されない。お前たちはアメリカの……アメリカの傭兵になるんだぞ』

『バカ野郎』

『やめろ、やめろ』

『引きずり降ろせ！』

三島の声は、もうほとんど聞き取れなかった。

『われわれは待った。四年間待った。自衛隊が起つのを四年間、熱烈に待った』

ヘリコプターが入れかわり立ちかわり、接近してくる。

『お前たちは武士か。それでも男か。男ならなぜ憲法を守る？ 自衛隊を否定する憲法を、なぜお前たちは守るのか』

下品な野次は、ますます高くなった。

『お前たちに将来はない。もはや救われる道はない。憲法はいつまでたっても改正されない。自衛隊には未来はないんだ。お前たちは違憲だ。自衛隊は違憲なんだ。お前たち全員が、憲法に違反しているのだ』

賛成の声は、どこからも聞こえなかった。

『この皮肉がわからんのか。この皮肉が：お前たちは護憲の軍隊になった。自衛隊を否定する憲法を、自衛隊が守るのだ。なぜ目覚めない。なぜ日本をこんな状態に』

しておくのか』

『偉そうなことを言うんなら、なぜ、われわれの同志を傷つけたんだ』

『抵抗したからだ』三島は間髪を入れず、やり返した。

『偉そうなことを言うな！』

『お前たちの中に、俺について来る奴は一人もないのか』

『バカ野郎』

『お前なんかと起つものか』

『気違い！』

『よし、だれも憲法改正のために決起しないんだな』

『そういうお前は男か』

『よく言った。お前たちは武士道を知っているだろう。剣の道が日本人にとって何を意味するか、知っているだろう。俺のほうこそ聞こう。お前たちはそれでも男か。武士か！』

三島の声は、ようやく静かになった。

『よし、お前たちは男ではない。決起しない。何もしないんだな。憲法がどうであ』

ろうとかまわさない。どうでもいいんだな。俺は自衛隊に幻滅した』

『下りてこい』

『あいつを引きずり下ろせ』

『バカ野郎』

野次は最高潮になったが、自衛隊員の大多数は無言でバルコニー上の三島を見上げていた。

『諸君は憲法改正のために起ち上がらないという見通しがついた。それでは、ここで天皇陛下万歳を三唱して演説を終わる。天皇陛下万歳。天皇陛下万歳。天皇陛下万歳！』

三島の背後に立って、下からは頭だけしか見えない森田必勝も、万歳を唱和し、両手を高く三度挙げた。

『チンピラ』

『撃ち落とせ！』

野次は最後まで続いた。

三島は胸壁から降り、森田を従えて総監室にとって返した。かがんで窓から室内

に入り、ヘリの上から狙うテレビのカメラの視野から消えた。森田があとに続き、窓が閉じられた。

私は三島から直接、「楯の会」をつくろうと思ったのは、『英霊の聲』を書いてからだ』と、言われたことがある。現人神である天皇を中心とする国体、その国体を守るのが「皇軍」としての軍隊である。

三島は多く語らなかつた。語るよりも、命を捨てる行動で、命より大切なものの存在を訴えた。希代の文章力を持つ三島が言葉ではなく、その命を捨てることで表現した。そうすることでは、表現できなかつた。

### 擬い物の国家、日本の現状

私が自らの著述を音読することで再現した三島の自殺だが、彼が訴えた憲法改正はまだ、実現していない。

日本はいまだに占領下に置かれている。日本が主権を回復しているといえない。アメリカの一部になってしまったか、卑しい属領のように見える。自衛隊は三島が檄で語ったよ



うに、アメリカの「傭兵」というだけでなく、アメリカ軍の補助部隊となってしまうている。実に、皮肉なことだ。

市ヶ谷での出来事は、何と呼んだらよいのか。「敗北事件」<sup>ケイブ・オブ・フレイユア</sup>だったのかもしれない。

読者は私とともに音読して、三島を野次った自衛隊員と、三島のどちらに味方するだろうか。そのために、私の著書から再録した。「外人部隊」と、日本人が対決したのだった。自衛隊員に決起を促したものの、まったく受け入れられず、試みは失敗した。

しかし、三島が命を断つたことよって、この問題は、今でも語られている。三島はその魂を生かし続けるために、死ぬことを選んだ。

私は三島が檄で訴えたことを、理解できる。自衛隊を否定する憲法改正、自衛隊のアメリカの傭兵のような情けない地位を改めること、現人神としての天皇という存在を守ろうということ、私は理解できる。

三島の最後の訴えは、非現実的なクーデターを<sup>けしか</sup>喚べたことさえ除けば、過激なものではけつてなかった。

アメリカが占領下で日本から永久に独立を奪うために押しつけた『憲法』を改めて、自

衛隊を軍とすること、天皇を日本の伝統文化になつた地位に戻そうとするのが、過激なのだろうか。イギリスの王室なしには、イギリスはない。天皇のない日本が、存在するだろうか。

軍隊を欠いては独立国となりえないのに、自衛隊は<sup>まが</sup>擬い物でしかない。属国憲法を改めて自衛隊を国軍としてつくり変えない限り、今日の日本は、擬い物の国家となっている。

日本は伝統と歴史を捨てた、異様な国となっている。イギリス人は、イギリスの伝統と、歴史を尊んでいる。イギリスを訪れる者は、政体に過去が現代のなかで息づいていることを、感じるはずだ。

三島が象徴的な呼びかけだったクーデターを成功させるのは、周到な準備が必要なことを、もちろん知っていた。日本国民を覚醒させるために、生命を捨てて、一幕劇を演じたのだった。